古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 187 号(2018 年 6 月)

女真文字談義（7）
―女真館訳語の雑字と来文、硬音と軟音、外来語の表記など―

吉池孝一

解読が必要な東アジアの“文字と言語”に関心を持つ学生と教員の対話です。登場人物は次のとおり。

佐藤久美：学生。歴史一般に関心がある。
山村健一：学生。入門段階のいろいろな言葉の学習を趣味としている。
安井教授：漢文の教員。いろいろな文字に関心がある。学生とともに金朝の言葉と文字の勉強をはじめた。

〈第７回目〉

山村健一：第６回目では、17 世紀後半（1664～1681）の満州語口語が出ている『寧古塔紀略』を検討しました。摩擦音 s が強い気音を伴っており[s^h]であったらしいということでした。

佐藤久美：破裂音や破擦音の二項対立子音も、気音の有無によっていたと考えて、大きな誤りはないとのことでした。収穫は小さくなかったです。

山村健一：満州語文語のほうは、いまひとつ、という印象です。満州語文語を書くための有圏点文字は、モンゴル文字を利用した従来の無圏点文字に改良を加えて、1632 年に作られたものです。新たに文字を作ったり、運用法を変えたりする場合、そこに当事者の音韻の習慣が反映するので、期待をしていたのですが。

佐藤久美：でも、基本的なことを確認することができました。満州語の固有語に漢語音の ts-, ts^h-に相当する破擦音はなかったことがはっきりしました。また、漢語音の ts-, ts^h-, s-は、当初、満州語の摩擦音 s で発音されていたこともわかりました。

山村健一：ところで、有圏点文字を作るときに、漢語音 ts-, ts^h-を表記するため、新たな文字 ts と ts^h を作りましたね。

佐藤さんの考えでは、 s でもって、漢語音の ts-, ts^h-, s-を表記する段階があって、つぎに無声無気音 ts-を表記するために文字 s に一画加えて文字 ts を作り、最後に無声有気音 ts^h-を表記するために、文字 ts に一角加えて文字 ts^h を作った、ということでした。

佐藤久美：満州語の学習書『滿漢字清文啓蒙』（1730 年）に書いてある ts^h-の書き順から推測したもので、根拠に乏しいのですが。

山村健一：文字 s に一画加えたものが文字 ts で、文字 s に二画加えたものが文字 ts^h となっています。ふつう一画加えた文字のほうが、二画加えた文字よりも早くできた、

と考えますので、この点も佐藤さんを支持しています。

文字 ts^h よりも先に文字 ts を作って、最後に文字 ts^h を作ったわけですね。これはつぎのような文字表記の段階があったことを示唆します。

①漢語音 ts-, ts^h-,s-を文字 s で表記する。

②漢語音 ts^h-,s-を文字 s で、漢語音 ts-を文字 ts で表記する。

③漢語音 s-を文字 s で、漢語音 ts-を文字 ts で、漢語音 ts^h-を文字 ts^h で表記する。

②の段階は、有気音 s-, ts^h-と、無気音 ts-を区別する意識が働いて初めて可能となります。この意識がどこから来たかということですが、満州語の二項対立子音（破裂音と破擦音）を、気音の有無で区別する、という音韻の習慣の反映とみていいのではないでしょうか。

安井教授：新たに作られた文字は他にもありました。漢語の“四 sɨ”“子 tsɨ”“慈 ts^hɨ”を表わす文字も作られました[1]。

山村健一：sɨ（四など表記）、ts（子など表記。母音を書かない）、s^hɨ（慈など表記）というものです。

佐藤久美：文字 ts だけ表記法が違っていて整合性を欠いています。

山村君の考えでは、文字 ts は、おもに（ほとんど）、漢語の拶子、粽子、檳子など指小辞の「子」に使用されるもので、当時すでに指小辞「～子」は軽声化していたため母音が聞こえにくかった。そこで子音のみを表記した、というものでしたね。

安井教授：これは、漢語の軽声がいつ発生したかという問題に関わります。有圏点満州文字における文字 ts が、軽声の反映だとするならば、1632 年の段階で軽声が有ったわけで、漢語の歴史に一つ資料を提供することになります。

佐藤久美：有圏点満州文字の作られ方と漢語史が関係しているわけですね。

これまで、女真語に取り組む準備として、現代の満州語口語と過去の満州語口語・文語を勉強したわけですが、今回から、いよいよ女真語に入るということでした。どのような資料を扱うのでしょう。

安井教授：明代に、女真文字で書かれた資料が幾つかあります。語彙集の「女真館雑字」、例文集の「女真館来文」、それから「永寧寺碑」という碑文があります。それらをとりあげて勉強しましょう。

《語彙集「女真館雑字」》

安井教授：明朝の成祖の永楽5 年（1407）に四夷館が設立され、諸民族語の通訳の養成と外交文書の翻訳が行われたようで、女真文字・女真語の資料が残っています。

佐藤久美：語彙集があるということですが、どのような内容なのでしょう。

---

[1] “四、子、慈”などの母音はふつう[ɿ]とするが、ここでは[ɨ]で代用した。

安井教授：女真館で作られた語彙集は「女真館雑字」と呼ばれています（図 1）。1 行目に女真文字で書かれた女真語の単語や連語があり、2 行目に女真語に対応する漢語があり、3 行目に女真文字・女真語の発音を漢字で注記したものがあります。これでワンセットであり、現存するものは 917 セットとなります。全体の構成は、「天文門」「地理門」「時令門」「花木門」など、内容別になっています。

山村健一：西夏語（せいかご）の勉強会の時に、『番漢合時掌中珠（ばんかんごうじしょうちゅうじゅ）』（現存する増訂本の序年は 1190 年）という資料をみました（図 2）。西夏語の解読の出発点となった資料です。それと似ていますね。

佐藤久美：『番漢合時掌中珠』は“西夏語（番）と漢語（漢）を同時に手に入れることができる美しい珠のような書”という意味でしょうか。1 行目に西夏文字・西夏語の発音を注記した漢字があり、2 行目に西夏文字で書かれた西夏語の単語や連語などがあり、3 行目に西夏語に対応した漢語があり、4 行目に漢語の発音を注記した西夏文字があります。

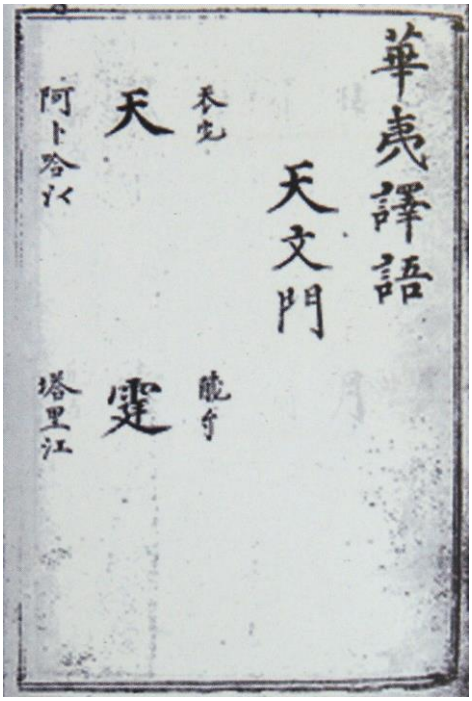

図 1. 女真館雑字[2]

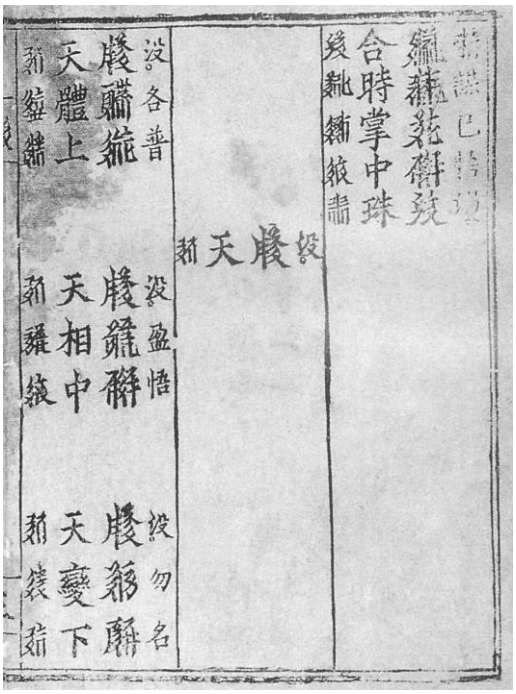

図 2. 番漢合時掌中珠[3]

山村健一：「女真館雑字」には、『番漢合時掌中珠』の 4 行目に相当する部分がありません。「女真館雑字」は、西夏の『番漢合時掌中珠』のようなものを参照して、

[2] 郭長海（2015）『陶瓷《女真文辞典》図録』長春：吉林文史出版社所載の図録による。いわゆるベルリン本。

[3] 俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所、中国社会科学院民族研究所、上海古籍出版社（1999）『俄蔵黒水城文献⑩』上海：上海古籍出版社所載図録による。

不要な部分を削って作ったのでしょうか。

安井教授：両者に関係があるかどうか、はっきりしませんが、形式が似ているのは偶然ではないかもしれません。いずれにしても、『番漢合時掌中珠』は西夏文字解読の出発点となり、「女真館雑字」も女真文字解読の出発点となりました。二つの資料は似た運命を担っているようです。

佐藤久美：「雑字」の概略を知るにはどうしたらいいのでしょう。

安井教授：清瀬（きよせ） 義三郎則府（ぎさぶろうのりくら）氏の *A Study of the Jurchen Language and Script*(1977)があります[4]この本は、女真館訳語の研究にとって期を画するものです。まずはこの研究書により「雑字」の最初の部分をのぞいてみましょう[5]。

	【女真語】	【漢語】	【漢字音注】	【ローマ字転写】
1	丕戈	天	阿卜哈以	abka(天)-i(の)
2	敢介	霆	塔里江	talgiyan(いなずま)
3	日	日	一能吉	inengi(日)
4	月	月	必阿	biya(月)
	・・・【略】・・・			
25	日芙伟右	日出	一能吉禿替昧	inengi(月) tuti(出る)-mei(～て)
26	月乐乓升	月落	必阿禿斡黒	biya(月) tuwe(落ちる)-hei(～た)
27	丕田土	天陰	阿卜哈禿魯温	abka(天) tulhun(暗い)
28	丕丸申	天晴	阿卜哈哈勒哈	abka(天) gar(出る)-ha(～た)

《「雑字」中の名詞の格語尾と動詞語尾》

佐藤久美：「女真館雑字」の 1 の天ですが、属格語尾-i が付いて abka(天)-i(の)となっています。これはどういうことでしょう。単語としては、abka(天)だけでいいとおもうのですが。また、25、26、28 の動詞の語尾が統一されていません。現代の満州語辞典では-mbi を付すなどの統一を図っています[6]。

---

[4] Kiyose,G.N. (1977) *A Study of the Jurchen Language and Script*. Kyoto：Hōritsubunka-sha.

[5] 項目の順番について、Kiyose,G.N. (1977)は、女真語、漢字音注、（ローマ字転写）、漢語とするが、ここでは「雑字」原本の順番に戻し、女真語、漢語、漢字音注とした。なお女真文字のフォントはネット上のフリーフォントを利用させていただいた。フォントの種類の制限により、「雑字」原本の字形と異なるものを使用した場合がある。

[6] 愛新覚羅烏拉熙春（2009）『明代の女真人『女真訳語』から『永寧寺記碑へ』京都：京都大学学術出版会によると、動詞語尾について次のようにある。「『女真訳語』に収録される数多くの動詞に接続する形態語尾は、統一した形式をとらず、終止形・形動詞形・副動詞形ないし動詞語幹のような様々な形にわたっている。こうした問題は甲種本『華夷訳語』にも現れているが、それはせいぜい少数のものに止まっており、大部分は動詞語幹そのもので表示される。ところが『女真訳語』の動詞の形態語尾を見れば、以下のように 18 種類にものぼるほど入り乱れている。」（104 頁）

安井教授：まず、Kiyose,G.N. (1977)の語彙の一覧表の中から、gen.、acc.、dat.-loc.と注記のあるものを全て抜き出してみましょう。

gen.属格

32　囡土羊 gurun(国)-ni(の)

71　奎戈 buwa(地域)-i(の)

272　胤禿羊 hagan(皇帝)-ni(の)

760　勺友囡土羊 dulila gurun(中国)-ni(の)

acc.目的格

62　亟函犬 ǰugu(道)-be(を)

341　导犬 ehe(悪)-be(を)

398　支犬 weile(仕事)-be(を)

479　千列犬 harin(朝廷)-be(を)

506　半犬 meǰilen(心) -be(を)

697　导犬 ehe(悪)-be(を)

748　夯昊字屋犬 kadagun merge(誠意) -be(を)

762　布犬 herse(言葉) -be(を)

843　禿屋犬 irge(人民) -be(を)

dat.-loc.与位格

70　奎岸 buwa(地域)-do(で)

81　玫爻岸 fon(時)-do(に)

605　下友 dalba(傍ら)-la(で)

816　市求岸 andan(途中) -do(で)

佐藤久美：「雑字」中の名詞に、いろいろな格語尾が付いているわけですが、このことについてこれまでどんな議論がなされたのでしょうか[7]。

安井教授：『女真訳語研究』（1983）で和希格氏はこの問題をとりあげて次のように述べます。

満州語・蒙古語において、名詞と格助詞【=格語尾】は連写される。蒙古語では“これより”という語が əguntʃə と書かれる。-ʃə は格助詞（～から）。満州語では“天の”という語が abkai と書かれる。-i は格助詞（～の）。こういった習

[7] 道爾吉、和希格（1983）『女真訳語研究』内蒙古大学学報哲学社会科学版，1983 年増刊。「雑字」が抱える問題を 4 つに分類し解説する。格助詞が付いた単語が 30 有ること、女真字の誤りが 25 有ること、漢字注音および漢語の意味の誤りが 40 有ること、複合語中の誤りが 136 有ること。なお、各種の動詞語尾についてすべて注記するが「雑字」が抱える問題とはしていない。愛新覚羅烏拉熙春（2009）は、道爾吉、和希格（1983）があげた問題のほかに、「雑字」が抱える問題として、動詞語尾の不統一をあげる。

慣が既に女真語の中にあり、それが満州語に受け継がれたのであろう[8]。（趣意）

佐藤久美：かりに、名詞と格語尾を一体のものとして認識する習慣が女真語にあったとして、囡土尖 gurun(国)-be(を)でも、囡土岑 gurun(国) -do(で)でもなく、どうして囡土羊 gurun(国)-ni(の)なのでしょうか。また、多くの名詞は格語尾が無い形式で収録されています。上に挙げた語彙だけに一定の格語尾が付くのはなぜでしょうか。和希格氏の説明だけでは納得できません。

山村健一：同感です。どうでしょう・・・、もしも、明の洪武年間に作られた華夷訳語甲種本のようなものから単語を拾い出したとすると、うまく説明できるのではないでしょうか。

佐藤久美：どういうことですか。

山村健一：華夷訳語甲種本は、漢字音訳モンゴル語の主文の右横に、漢語の逐語訳（傍訳）が付いています（図 3）。大きく書かれた「騰吉舌里迭」の部分がモンゴル語の主文で、右横の小さく書かれた「天」が漢語の傍訳です。主文と傍訳の形式となっているわけですが、もしも、初期の「女真館雑字」も同様の形式をもっていて、漢語の主文の横に、女真文字・女真語の傍訳が付いていたならばどうでしょう。そこから、漢語とその傍訳の女真文字・女真語を同時に引き抜いたならば、「天　―　禾戈 abkai」のような対応となるのではないでしょうか。

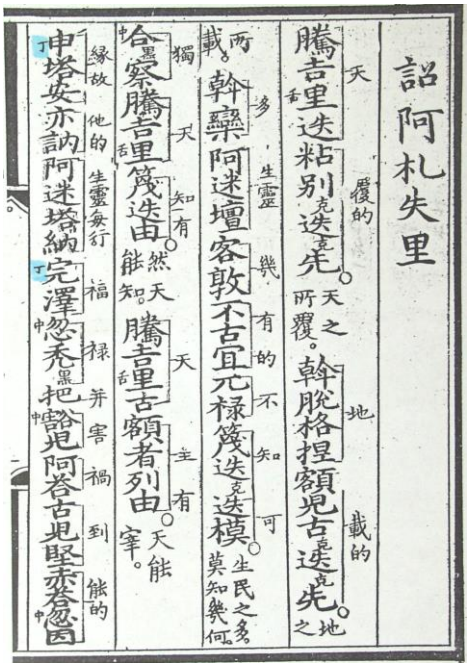

図 3.華夷訳語甲種本[9]

---

8 「在《雜字》單詞中帶有格助詞的共有三十個詞。在滿蒙語言中格助詞與前面語詞連寫現象是常有的。如：蒙語“從此”一詞往往寫爲əgunʧə，把從格助詞əʧə與前面的詞連寫在一起。滿語“天的”一詞往往寫爲 abkai。看来這種習慣早在女真語中已有了，而女真語發展到滿語，也就把這個習慣沿襲了下来。」（255 頁）

佐藤久美：たしかに、主文と傍訳を対応させた文章のなかから、主文と傍訳のペアをそのまま引き抜いてきたとすると、名詞に各種の格語尾が付いていることも、動詞の語尾が統一されていないことも、説明がつきますね。

山村健一：「女真館雑字」の全ての単語とは言いませんが、すくなくとも、「名詞＋格語尾」や「動詞＋様々な語尾」となっているものについては、主文の漢語と、その傍訳の女真語を、ペアで引き抜いて語彙集に収めたとすると、「女真館雑字」の不自然さが理解できます。

佐藤久美：四夷館では「雑字」のほかに、女真文字で書かれた文書「女真館来文」も作られたとのことですが、その「来文」は主文と傍訳からできているのでしょうか。

《進貢の上奏文集「女真館来文」》

安井教授：残念ながら、現在見ることのできる「来文」は、最初に漢文があり、つぎに女真文があり、それぞれ独立しています（図 4）。

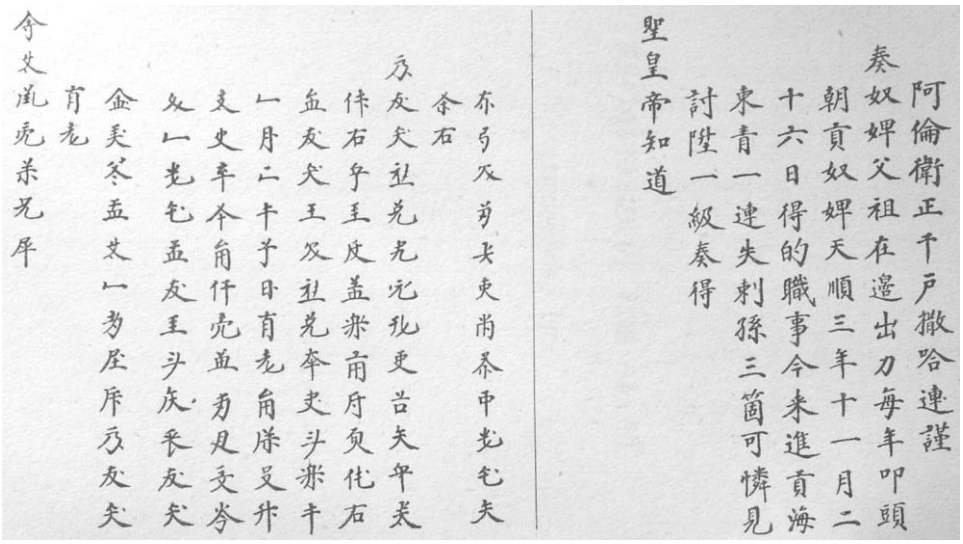

図 4. 女真館来文[10]

ご覧のとおり、主文と傍訳という構成にはなっていません。しかし、女真文に問題があることについては従来より指摘があります。どういうわけか、全ての「来文」が、漢語に付された傍訳の集成のようなものとなっており、女真語の文法からみると破格です。

山村健一：女真文が破格で、傍訳を並べたようなものだとすると、現存する「来文」は漢文と女真文に分かれていますが、その前段階として、主文と傍訳からできていた「来文」があったと考えても悪くはないですね。

---

[9] 王雲五主編（1975）四部叢刊 33『華夷訳語』台湾：台湾商務印書館。

[10] Grube,W. (1896) *Die Sprache und Schrift der Jurčen*. Leipzig.所載の図録による。

《「来文」の初期の形体》

安井教授：もしも山村君が言うように、「来文」の初期の形体が、華夷訳語甲種本のように、主文（漢文）と傍訳（女真文字・女真語）からできていたと仮定して、現存する図 4 の「来文」を並べ直すと次のようになります。女真文字のローマ字転写と日本語は、Kiyose,G.N. (1977)を参考にして付します。

令文	胤元羊	兄犀
聖	皇　帝	知　道
ačiburu	haganni	sahi
聖なる	皇帝の	知りますよう

＊道爾吉、和希格（1983）は、次のように動詞語尾を訂正する。

1) 奏乃友矣 ǰaulamai。矣 mai は副動詞現在形で誤。正しくは現在終止形の戈 bi。
2) 得肖戈 bahabi。戈 bi は現在終止形で誤。正しくは過去中止形の吏 bi。
3) 来角仟 digun。仟 gun は命令形で誤。正しくは過去中止形の吏 bi。
4) 進貢売益劣 telebuma。劣 buma は使動態で誤。正しくは現在形の右 mei。
5) 討金夷 baišin。夷 šin は命令形で誤。正しくは現在形の右 mei。

山村健一：漢語の主文から女真文字・女真語の傍訳を分離すると、いまある「女真館来文」になります。

阿倫衛正千戸撒哈連謹
奏奴婢父祖在邊出力毎年叩頭
朝貢奴婢天順三年十一月二
十六日得的職事今来進貢海
東青一連失剌孫三箇可憐見
討陞一級奏得
聖皇帝知道

亦弓及劣与夷尚茶申戈乍矢
糸右
乃友矣迷兇尤冗我吏旨矢卑芙
伟右夸壬反益狩甬斤奐伐右
益友矣王及迷兇夲夬斗狩十
一月二十亍日肖戈角岸旻升
支史卒斗角仟売益劣貝文兮
夂一戈乍五友壬斗灰乖友矣
金夷冬五文一劣屋斥乃友矣
肖戈
令文胤元羊兄犀

佐藤久美：試みに、この中から、漢語と傍訳のペアを取り出してみませんか。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

格語尾

①事 — 攴史（事を）、②皇帝 — 凧秃并（皇帝の）

動詞語尾

③謹 — 矢杀右（謹む＋～し）、④出 — 关体右（出る＋～し）、⑤叩頭 — 甬府免佬右（叩頭する＋～し）、⑥得 — 育尧（得る＋～る）、⑦来 — 角仟（来る＋命令の語尾）、⑧可憐見 — 乇友矣（憐れむ＋～し）、⑨討 — 金秀(求める＋命令の語尾)、⑩陞 — 冬缶文（上げる＋～られる）、⑪知道 — 兄犀（知る＋～ますよう）

安井教授：いま佐藤さんがあげた①から⑪までの漢語と女真文字・女真語のペアは、そっくりそのまま「雑字」のなかに、同じものを見つけることができます。

「来文」		「雑字」
格語尾		
①事 — 攴史	→	398. 攴史　事　委勒伯 weile-be
②皇帝 — 凧秃并	→	271. 凧秃并　皇帝　罕安你 hagan-ni
動詞語尾		
③謹 — 矢杀右	→	860.矢杀右　謹　者只昧 ǰeǰi-mei
④出 — 关体右	→	714.关体右　出　禿替昧 tuti-mei
⑤叩頭—甬府免佬右	→	751. 甬府免佬右　叩頭　兀住康克勒昧 uǰu kankele-mei
⑥得 — 育尧	→	366. 育尧　得 八哈別 baha-bi
⑦来 — 角仟	→	712. 角仟　来　的温 di-gun
⑧可憐見 — 乇友矣	→	387. 乇友矣　憐　只剌埋 ǰila-mai
⑨討 — 金秀	→	415. 金秀　討　伯申 bai-šin
⑩陞 — 冬缶文	→	427. 冬缶文　陞　斡失卜魯 weši-buru
⑪知道 — 兄犀	→	353. 兄犀　知　撒希 sa-hi

＊二か所、アンダーラインの部分が異なる。

佐藤久美：逆に、「雑字」の単語を参照して「来文」を作ったので一致するのだ、という考えもあるではないでしょうか。

山村健一：しかしそれだと、「雑字」の中に「名詞＋格語尾」や「動詞＋様々な語尾」があるという不都合を説明できません。

安井教授：これまでも、「来文」の漢文と女真文を、主文と傍訳に見立てて、解読をすすめる方法がとられましたが、それは研究を進める上での便宜のためです。山村君

は、研究の便宜のためではなく、実際に、初期の「来文」は、主文(漢文)と傍訳（女真文字・女真語）からできていたと想定するわけですね。

たしかに、初期の「来文」が主文と傍訳からできていたとすると、①「雑字」中の名詞に各種の格語尾が付いている、②「雑字」中の動詞に各種の動詞語尾がついている[11]、③女真文が、漢語の文法にしたがった逐語訳となっている、などの問題を無理なく説明することができます。

《現存する「来文」は不完全なものか》

佐藤久美：初期の「来文」が主文と傍訳からできていて、その傍訳を引き抜いてつなげたものが現存する「来文」の女真文ということですが、このような女真文はどのように評価されているのでしょうか。

安井教授：金光平、金啓孮（1980）『女真語言文字研究』があります。1964 年に内蒙古大学学報の専号として刊行され、1980 年に文物出版社から再版された女真語研究の基本図書です。これには、次のようにあります。

> 「来文」は漢文に基づき、一字毎に、「雑字」の単語を積み上げて作ったものであり、適当な女真語の単語が無い時は、女真文字で漢字音を音写して代替えもしている。「来文」はすべてそのようなものであり、偽物であることは問わなくても分るし、文法が合っているかどうかなど言及するまでもないことである[12]。

また、同書によると、属国が明朝に進貢するばあい上奏文が必要であるため、上奏文の作成を四夷館の館員に依頼した。「来文」はそのようなもので、進貢者自らが書いたものではないとします。道爾吉、和希格（1983）および愛新覚羅烏拉熙春（2009）も、ほぼ同様の見方です。

佐藤久美：不完全な文という評価ですが、違う見方をしてもいいのではないでしょうか。

山村健一：どういうことですか。

佐藤久美：元朝では、パスパ文字で書かれたモンゴル語の主文に、“副文”としてモンゴル語を直訳した漢語を添えました[13]。“蒙文直訳体”などとよばれます。もちろ

---

[11] 愛新覚羅烏拉熙春（2009）は、動詞語尾の不統一を「雑字」が抱える問題の一つとする。ゼロ語尾も含めて、動詞語尾が付された 174 の単語をあげ、18 種に分類する。

[12] 「到於“來文”則完全按漢文遂字以女真文“雜字”堆砌而成，没有相當的女真語詞時就用女真字譯漢字音代替，所有的“來文”都是如此，其爲贋品不問可知，更談不到語法是否相合了。」（185 頁）

[13] フビライは、至元六年（一二六九）、詔を下して蒙古新字（パスパ文字）を天下に公布した。その詔には次のようにいう。「朕惟(おも)うに、字は言を書し、言は事を紀す。これ古今の通制なり。我が国家朔方に基礎を確立してより、その風俗は簡潔古雅をとうとび、いまだ文字の制作にいとまあらず。およそ施用の文字は、漢字および畏吾(ｳｲｸﾞﾙ)字を用い、よって本朝の言語を表達しきたる。これを遼・金および遠方の諸国に考うるに、おおむね各国文字を有す。いま我が国の文治ようやく興り、しかも字書を缺くは、一代の制におい

ん、蒙文直訳体といっても、さまざまなレベルのものがあるようです。このような破格の漢文は、碑文に刻まれていますし、行政機関の公式文書のなかにもでてきますので、文体の一つとして、諸民族に認められていたとかんがえるべきです。明朝の「来文」の破格な女真文も同じではないでしょうか。フビライの至元六年（一二六九）の詔には、パスパ文字によるモンゴル語文に副文として各国の文字による文を添えよとあります。明朝の「来文」の場合、漢文が主文のパスパ文字・モンゴル語文に相当し、副文の各国の文字による文が女真文に相当するのではないでしょうか。

山村健一：なるほど。元朝の破格な漢文を“蒙文直訳体”とすれば、明朝の破格な女真文は“漢文直訳体”ということですね。

安井教授：ほぼ同時期の永楽十一年（1413）に立てられたとされる碑文があります。「永寧寺碑」というものです。この碑文の女真文は破格ではありませんので、時と場合によって、“漢文直訳体”の女真文が利用された。それは元朝以来の伝統に沿ったものでもある、ということですね。

佐藤久美：はい、そういうことだと思います。

《「雑字」に反映した明代女真語の破裂音と破擦音》

佐藤久美：ところで、「雑字」に反映した明代女真語の破裂音・破擦音の音韻はどのようなものだったのでしょう。

安井教授：Kiyose,G.N. (1977)によると、「雑字」から帰納することができる明代女真語の子音の音声は[t, k, q, b, d, g, γ, f, s, š, h, x, č, ǰ, m, n, ŋ, l, r, w, y]です。それで、破裂音・破擦音の音声は次のような対立となっています。なお、fortis（硬音）の[p]はなかったようです。

fortis（硬音）	---	t	k	q	č
lenis（軟音）	b	d	g	γ	ǰ

fortis（硬音）と lenis（軟音）の区別を立てますが、これは、満州語を含めてツングース諸語に存在するので女真語にも認めることができるとのことです。また、華夷訳語においては、夷語の fortis（硬音）と lenis（軟音）を、漢語の無声有気音と無声無気音で音訳し分けており、女真語の場合も、その音訳法によっている、とします[14]。

てまことに不備なりとせり。故に特に国師八思巴に命じて始めて蒙古新字を制作せしめ、一切の文字を訳写せしむ。順言達事を期せんとするのみ。自今以往、璽書の発布するものみな蒙古新字を用い、かさねて各々その国字をもつてこれにそえよ。」

[14] “There is no problem in those cases where the Jurchen sound transliterated into Chinese existed in the phonology of that period. The problems arise in those cases where the Chinese did not differentiate sounds which were phonemically differentiated in the Jurchen language. The most

佐藤久美：そもそもの話なのですが、fortis（硬音）と lenis（軟音）とは何だったでしょう。以前、話の中に出てきたような気もするのですが、無声音と有声音のことでしょうか。

《fortis（硬音）と lenis（軟音）》

安井教授：Kiyose,G.N. (1977)の音声表記の t，k，q，č は無声音に見えますし、b，d，g，γ，ǰ は有声音に見えますので、佐藤さんが無声音と有声音と考えるのも無理はありません。しかし、無声音と有声音とせずに、わざわざ fortis（硬音）と lenis（軟音）としたわけですから、何か理由があったのでしょう。Kiyose,G.N. (1977)には直接言及した部分はないので[15]、一般的な解説書をのぞいてみましょう。

佐藤さん、そこに『言語学大辞典　第６巻　術語編』があります[16]、“硬音”の項目を引いてみてください。なんと書いてありますか。

佐藤久美：はい・・・・。音声器官の筋肉の緊張が強いものを硬音といい、弱いものを軟音というようです。

山村健一：緊張の有無ですか・・・。緊張の有無を聞き分ける、などということができるのでしょうか。

佐藤久美：具体的な音声として、無声音と有声音、有気音と無気音などと現れるようです。ただ、「筋肉の緊張に関しては実験音声学的には必ずしも確実な結果は得られておらず，硬音，軟音という区別が音声学上有効なものかどうかを疑問視する学者もある。最近は，硬音，軟音の区別は緊張音（tense），弛緩音（lax）の区別の一環として論じられることが多い。」とあります。

安井教授：“緊張音”の項には何が書いてありますか。

佐藤久美：緊張音（tense）と弛緩音（lax）は、母音と子音の両者に用いられる用語のよう

---

striking example is the contrast of fortes and lenes. As was mentioned above, Chinese had lost this contrast, which can be presumed to have existed in Jurchen on the basis of their existence in the other Tunguz languages including Manchu, and accordingly the Chinese should have been unable to differentiate in writing the fortes from lenes in Jurchen. However, when investigating each “barbarian” word in the *Hua-i-i-yü* with its Chinese transliteration, one can observe the fact that all the fortes of the “barbarian” languages are transliterated into Chinese with aspirated consonants and lenes with unaspirated consonants. The method of transliteration of Mongolian words used in the *Secret History of the Mongols* is the same. As a matter of fact, aspirated consonants in Chinese transliteration correspond to the Jurchen phonemes which are reflected fortes in the Manchu cognates, and unaspirated consonants correspond to the Jurchen phonemes which are reflected lenes in the Manchu cognates throughout the text. ”(38-39 頁)。引用文の fortes と lenes につき、本文中では fortis と lenis とした。

15 中古漢語の有声音は lenis（軟音）であったが、この有声音は後に音韻変化によって無声無気音と無声有気音の fortis（硬音）となったことにより、漢語には fortis（硬音）と lenis（軟音）の対立が無くなったとする。（35 頁）

16 亀井孝、河野六郎、千野栄一編著（1996）『言語学大事典 第 6 巻 術語編』東京都：三省堂。

です。緊張音は、音響的にはより長い持続時間とより大きな音のエネルギーによって特徴づけられ、生理的には緊張音は弛緩音よりも大きな明確さと圧力をもって調音されるとあります。

山村健一：音響の特徴は聞き手にとって重要なことで、生理の特徴は話し手にとって重要なことですね。しかし、こういった対立を設けて何の役に立つのでしょうか。

佐藤久美：そのことも書いてあります。音声が複数の点で異なっていてどれが本質的なものか決め難い場合（例えば、英語の beat[biːt]と bit[bɪt]の母音は、長音と短音の対立であると同時に[i]とやや緩んだ[ɪ]の対立でもある）や、音声が環境によって異なるため一貫した特徴による対立の設定が難しい場合（例えば、英語の p,t,k と b,d,g は対立するが、b,d,g は環境によって無声音にもなる）、このような表面的な複数の違いを、緊張音（tense）と弛緩音（lax）とすると、一つに還元できるとのことです。

ただ、音声的な実態を伴わないラベル貼りに終わりかねないので注意が必要、ともあります。

山村健一：なるほど、ラベル貼りに終わらせないため、明代女真語の二項対立子音の音声の実態はなにか、ということについて考えなければなりませんね。

安井教授：ところで、皆さんに提案があります。用語が複数あると混乱しますので、ここでは硬音と軟音ということで話をすすめませんか。

山村健一：賛成です。

佐藤さん、明代女真語の硬音と軟音の実態を考える前提として、満州語について、これまでの議論をまとめてもらえませんか。

《明代女真語の fortis（硬音）と lenis（軟音）》

佐藤久美：現代満州口語を調査した文献がありましたね。服部四郎・山本謙吾（1956）は[17]、新疆ウイグル自治区伊犂地方の錫伯族出身のインフォーマントに対する調査でした。/p/と/b/、/t/と/d/、/k/と/g/、/q/と/ɢ/、/c/と/j/（/ /は音韻、[ ]は音声）を対立する子音として挙げ、前者を強音（tense）とし、後者を弱音（lax）とします。この用語は『言語学大辞典』の緊張音（tense）と弛緩音（lax）のことですね。

それで、強音（すなわち硬音）は、無声有気音ですが、強音が語末にあり、母音で始まる単語が結合して合成語となると、無気音となります（例えば、「事件」[bait^{h}] ＞「大丈夫」[bait-aqw^{h}]、「はだか」[fiaqw^{h}] ＞「はだかになる」[fiaqw-om]）。

他方の弱音（すなわち軟音）は無気の半有声音ですが、有声音にはさまれると有声音になります。

---

17 （1956）「満州語口語の音韻の体系と構造」『言語研究』30：1—29。（1989）『服部四郎論文集 3 アルタイ諸言語の研究Ⅲ』1—55，東京：三省堂。

山村健一：これが音声の実態だとすると、話し手と聞き手はどのように音を区別したと考えたらいいのでしょうか。

安井教授：硬音は、無声有気音。軟音は、無気音（無声無気音～有声無気音）ということでしょう。

山村健一：それでは、「事件」[bait^h] ＞「大丈夫」[bait-aqw^h]、「はだか」[fiaqw^h] ＞「はだかになる」[fiaqw-om]のように、硬音が無気音となる例については、どう考えるのでしょうか。

安井教授：硬音が軟音化する、ということでいかがでしょう。「事件」[bait^h] ＞「大丈夫」[bait-aqw^h]の場合は、近接する二つの硬音（[t^h]と[qw^h]）が労力の軽減のために異化を起こして後者が軟音化したと説明できます。「はだか」[fiaqw^h] ＞「はだかになる」[fiaqw-om]については、どうして軟音化するのか、音声上の説明はいまのところ困難です。

山村健一：そうしますと、硬音は、[p^h]、[t^h]、[k^h]、[q^h]、[c^h]のようなピンポイントの音で、軟音は条件によって[p～b̥～b]、[t～d̥～d]、[k～g̥～g]、[q～ɢ̥～ɢ]、[c～ɟ̥～j]となるわけですね。軟音は、無気音でありさえすれば良いということで、実現する音声の幅が広い。その点では軟音という用語がふさわしいかもしれません。

佐藤久美：軟音の[p～b̥～b]、[t～d̥～d]、[k～g̥～g]、[q～ɢ̥～ɢ]、[c～ɟ̥～j]を簡潔に音韻として表現できないものでしょうか。

安井教授：音韻としては、{p}でも{b}でもいいのでしょう。しかし{b}を採用して、{p^h}と{b}、{t^h}と{d}、{k^h}と{g}、{q^h}と{ɢ}、{c^h}と{j}とすると、声の有無（有声と無声）と息の有無（有気と無気）の二つの特徴によって区別されているように見えます。しかし重要なのは息の有無の方です。そこで、{p^h}と{p}、{t^h}と{t}、{k^h}と{k}、{q^h}と{q}、{c^h}と{c}とし、無気音の系列は閉鎖が弱い軟音で、音声としては[p～b]、[t～d]、[k～g]、[q～ɢ]、[c～j]として実現すると注記するのはいかがでしょうか。

山村健一：賛成です。

佐藤久美：いまひとつ現代満州語口語の文献があります。清格爾泰（1982）です。これは1961年から中国の黒龍江省富裕県の三家子で行われた調査で、1982年に公表されたものです。破裂音と破擦音として、b と p 、d と t 、g と k 、ɢ と q、dʐ と tʂ 、dʑ と tɕ を挙げ、前者の b d g ɢ dʐ dʑ を<u>半有声の無気音とし</u>、後者の p t k q tʂ tɕ を<u>無声の有気音</u>とします。両者を、無気音と有気音の対立と見ていることは、子音の図表から明かです。これも、硬音は無声有気音で、軟音は無気音（無声無気音～有声無気音）としていいのではないでしょうか。

山村健一：古い満州語資料として『寧古塔紀略』（康熙六十年・1721年）がありましたね。

佐藤久美：この資料では、満州語の語頭の s は[s^h]であり、それを漢人が ts^h と聞き取り ts^h の漢字で音写した例が含まれていました。当時の満州語[s^h]は、硬音であったと

していいのでしょう。また『寧古塔紀略』の漢字音訳満州語の硬音の系列の音と、漢語の無声有気音が、きれいに対応しました。また、軟音の系列の音と、漢語の無声無気音も、きれいに対応しました。硬音と軟音は様々な音声として実現するわけですが、もしも『寧古塔紀略』の満州語が、硬音は無声有気音、軟音は無気音（無声無気音～有声無気音）という音でなかったならば、対応にばらつきが生じることでしょう。

佐藤久美：回りくどい言い方になりますが、対応にばらつきが無いことをもって、硬音は無声有気音、軟音は無気音（無声無気音～有声無気音）であったとしてよいのではないでしょうか。

山村健一：満州語は女真語と最も近い関係にあるとされるので、明代の女真語も満州語と同様であり、硬音は無声有気音で、軟音は無気音（無声無気音～有声無気音）であった、としていいのではないでしょうか。

そこで、Kiyose,G.N. (1977)にしたがって、明代女真語の音声の実態を反映させるとこのようになります。

fortis（硬音）	---	t^h	k^h	q^h	$č^h$
lenis（軟音）	p～b	t～d	k～g	q～ɢ	č～ǰ

さらに、話者の言語習慣としての音韻は、このようになります。

fortis（硬音）	---	t^h	k^h	q^h	$č^h$
lenis（軟音）	p	t	k	q	č

＊{p, t, k, q, č}は閉鎖が弱い軟音であり、音声としては[p～b, t～d, k～g, q～ɢ, č～ǰ]として実現する。

＊体系を重視して、{k^h}{q^h}をまとめて{k^h}とし、{k}{q}をまとめて{k}とすることができるかもしれない。

《「雑字」における漢語音 ts-, ts^h-, s-の表記》

佐藤久美：これまで話題にしてきた漢語音の ts-, ts^h-, s-は明朝の女真語ではどのように扱われているのでしょうか。

安井教授：「雑字」の単語や連語は、「女真語―漢語―女真語に対する漢字音注」の順に並んでいます。この中から、漢語音 ts-, ts^h-, s- を持つ借用語を探しだすことが第一の作業ですね。それから、その漢語を表記している女真文字が借用語の専用字であるかどうかを検討する、ということになります。

佐藤久美：女真文字を検討するということですが、女真文字は金代に作られたものです。明代に作られたものではありません。順番としては、まず金代の女真文字を検討し、当時の文字を作成した意図を知ることが必要なのではないでしょうか。

安井教授：たしかに、文字をどのような意図をもって作ったかということは重要なことで

す。しかし、それをどのように利用するかということは、また別の問題です。たとえ、金朝の作成の意図とは異なっていても、明朝には明朝の文字利用の意図があったはずです。それを明らかにすることで、文字の背景にある、音の実際をのぞき見ることができるのではないでしょうか。

それではページを分担して「雑字」の中から漢語音 ts- ,ts^h-, s-を持つ借用語を拾い出してみましょう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

安井教授：みなさんの結果をまとめると表 1 から表 3 となります。Kiyose (1977) 、道爾吉・和希格(1983)の道爾吉氏、愛新覚羅烏拉熙春(2009)の推定音を付します。

《漢語音 ts-の表記》

安井教授：まずは漢語音 ts-から始めましょう（表 1）。

佐藤久美：単語の音注をみると、音注というよりも<u>意味をもった文字として</u>漢語の単語をそのまま提示する傾向があります。このような場合の音注を、どのように理解したらいいのでしょう。

山村健一：表 1 の（ア）は、指小辞（ししょうじ）の子をそのまま音注としていますが、子の漢語の音声は tsɨ であったはずですから、素直に考えると、弁の音は tsɨ であり、漢語借用語の専用字ということになります。もっとも弁が tsɨ だとすると、（イ）252 の「仩弁千 剪 哈子哈」は固有語のようにみえるので、固有語に tsɨ という音があるのは不都合だとなります。

表 1. ts-

（ア）

番号	女真語	漢語	音注	Kiyose (1977)	道爾吉・和希格(1983)	烏拉熙春(2009)
125	矢弁	麥	埋子	maiǰi	maise	maisï
196	半弁	樓	樓子	lauǰi	leuse	ləusï
211	斧弁	瓦	瓦子	waǰi	wase	wasï
259	夭弁	盒	和子	hoǰi	hose	hosï
270	朮无子弁	令牌	扎失安肥子	ǰašigan faiǰi	ǰašiŋan fise	ʤaʃiğan faisï
560	弔弁	絹	絹子	giyuwanǰi	guense	------
870	天弁	太子	太子	taiǰi	taise	taisï
871	生弁	皇子	皇子	huwanǰi	hoŋse	huaŋsï

（イ）

番号	女真語	漢語	音注	Kiyose (1977)	道爾吉・和希格(1983)	烏拉熙春(2009)
252	仩弁千	哈子哈	剪	haǰiha	hasha	hasha

＊満州語文語 hasaha ハサミ

＊山本謙吾（1969） [*x*as*x*]ハサミ

＊清格爾泰（1982）[*x*ɑːskɯ] ハサミ

＊「会同館訳語」（明末）「哈雑」

（ウ）

番号	女真語	漢語	音注	Kiyose (1977)	道爾吉・和希格 (1983)	烏拉熙春(2009)
279	冉东	將軍	將軍	ǰan giyun	ǰianŋ giyun	saŋ-giun
596	韦	左	左	ǰo	so	so

＊満州語文語 jiyanggiyūn 将軍

＊618 韦介 黄 瑣江 sogiyan。596 韦に加点したものが 618 韦

（エ）

番号	女真語	漢語	音注	Kiyose (1977)	爾吉・和希格 (1983)	烏拉熙春(2009)
623	舟丑	皂	子敖	ǰiyau	sau	sïo
308	禾及花夂	總兵	素温必因	sunbin	sunbin	suŋ---
東 29	禾及	總	素温	sun	sun	suŋ

＊番号において、東としたものは東洋文庫本を指す。以下同様。

佐藤久美：その（イ）252「付舟乎 剪 哈子哈」ですが、満州語文語に hasaha ハサミとあります。山本謙吾（1969）[18]は新疆ウイグル自治区伊犂地方の錫伯族出身のインフォーマントの言語ですが[*x*as*x*]とあります。清格爾泰（1982）[19]は、1961 年から中国黒龍江省富裕県の三家子で行われた調査で 1982 年に公表されたものですが[*x*ɑːskɯ]とあります。これらによると固有語のようにみえますが、明末の「会同館訳語」の女真語には「哈雑」（雑は tsa）とあるので、単純に女真語の固有語と考えていいものか不安が残ります。なお、子 tsɨ という音も、雑 tsa という音も、満州語の固有語にはないので、女真語の固有語にもなかったはずです。

山村健一：そうしますと、一部不安は残りますが、舟は、ほぼ外来語の表記に用いられる文字と考えていいようですね。そうであるならば、漢語音 tsɨ の表記のために作られたけれども、女真語話者は摩擦音の s-で発音したということでしょうか。

279 冉东（將軍）について、將の漢語音は tsianŋ です。たとえ後代の満州語文語でǰ（ j ）であったとしても、冉に女真語を表記した例がない限り、漢語音表記の専用字として tsianŋ の表記を目指したものとせざるをえません。

---

18 『満洲語口語基礎語彙集』東京：アジア・アフリカ言語文化研究所。

19 清格爾泰(1982)「満語口語語音」『内蒙古大学学報（哲学社会科学版）』。（1998）『清格爾泰 民族研究文集』232-355，北京：民族出版社。

596 ⿰(左)について。「618　⿰　黄　瑣江」のように、⿰に加点した⿰の方は女真語の{so}として多用されます。596 の⿰は、漢語音表記の専用字として tso の表記を目指したものでしょう。

なお、總 tsuŋ については、sun（素温）とあります。規範としての音でも、女真語話者の発音でも、{sun}と読むということです。女真語に借用されて久しいため、女真語なまりで発音されたのでしょうね。

		規範としての音	女真語なまりの音
子	～⿰（子）	tsɨ {dzɨ }	sə
左	⿰（左）	tso {dzo}	so
皂	⿰⿰（子敖）	tsau{dzau}	sau
總	⿰⿰（素温）	sun{sun}	sun
將軍	⿰⿰（將軍）の⿰（將）	tsiaŋ{dziaŋ}	ǰan

佐藤久美：山村君の言う“規範としての音”と“女真語なまりの音”とはどういう違いですか。

山村健一：たとえば、日本語の中のビルディングのディは英語風の[di]を意図しています。現在では、ほとんどの人が[di]と発音することができます。しかし、高齢の人の中には、ビルジング（ビルヂング）としか発音しない人がいます。ディという表記が意図する音はディ[di]です。これは規範としての音です。しかし、日本語なまりの発音はジ（ヂ）[dʒi]であり、時代をさかのぼれば、そのような人は更に多くなるでしょう。

佐藤久美：そうしますと、⿰は tsɨ という音を意図しているけれども sə と発音する人もいるということですね。文字が目指す音と、実際の音がずれていると。

安井教授：そういう場合もあるでしょうが、別の場合もありますよ。例えば、仮名で「ヴァイキング」と書く例が世界史の教科書に載っています。外来語の表記を原音に近づけようというものです。この「ヴ」は日本語にない[v]を表記したものですが、日本語の中で、表記のとおりに発音する人はまずいません。これは表記上のもので、ふつうはバイキングと発音するでしょう。同じように⿰は外来語 tsɨ をなるべく精密に表記しようとしたもので、実際には sə と発音されたということであるかもしれません。

面倒なことを言うようですが、外来語の表記については、その表記で規範としての実際の音を目指す場合と、表記を原音に近づけようとする表記上だけの場合があるので、慎重に対応しまければなりません。

山村健一：慎重にということですが、実際には女真文字を全てローマ字に転写しなければなりません。どのようにローマ字に転写したらいいのでしょうか。

安井教授：漢語のみに用いられる文字は、無理に女真語なまりの転写にはしないで、漢語

音をそのまま出せばいいのではないでしょうか。

山村健一：そうしますと、つぎのようになりますね。

		外来語	女真語なまりの音
子	～舟（子）	tsɨ	sə
左	斥（左）	tso	so
皂	舟丞（子敖）	tsau	sau
總	禾及（素温）	（sun）	sun
將軍	冉东（將軍）の冉（將）	tsiaŋ	ǰan

《漢語音 ts^h-の表記》

安井教授：次は漢語音 ts^h-の状況です（表 2）。

佐藤久美：265 の夂府（寸木児）は、漢語からの借用語の夂（寸）を含む単語です。寸の漢語音は ts^{h}un です。女真語の中に根付いた単語のようにみえますが、「雑字」や「来文」の固有語に夂はみえないので、今のところ、借用語音 ts^{h}un を表わすとせざるをえません。

627 や 633 の乩刈（翠）という語の、翠の漢語音は ts^{h}uei です。これを女真語としては {č^{h}ui}と読んだということについては、音注の出 ʧ^{h}iu 衛 uei、および＊101 や＊東 1 において乩を{č^{h}u}と読むことからわかります。

312.の夷尚（千戸）の夷（千）の漢語音は ts^{h}ien です。音注による限り夷は ts^{h}ien ですが、夷は＊804 の「夷益右兮夭　考選　千忒昧團住剌」のように固有語で使用されており、対応する満州語文語が čendembi（試験する）です。これより{č^{h}en}であることがわかります。

	外来語	女真語なまりの音
夂（寸）	ts^{h}un	č^{h}un, sun
乩刈（出衛）	（č^{h}ui）	č^{h}ui
夷（千）	（č^{h}ən）	č^{h}ən

表 2. ts^h-

番号	女真語	漢語	音注	Kiyose (1977)	道爾吉・和希格 (1983)	烏拉熙春(2009)
265	夂府	寸	寸木児	čun mur	čunmur	sunmur
312	夷尚	千戸	千戸	čenhu	čen hu	ʧən-hu
627	乩刈	翠	出衛	čuwi	čui	ʧui
633	禾臾乩刈	柳翠	素黒出衛	suhe čuwi	suheičui	suhəʧui

＊804　夷益右兮夭　考選　千忒昧團住剌 čentemei tuwanǰula

＊101　乩及甬土　重陽　出温都魯　čun dulhun

＊東 1.　乼夃　　充　　出温　　čun

《漢語音 s-の表記》

佐藤久美：最後は漢語音 s-ですね（表 3）。

表 3. s-

番号	女真語	漢語	音注	Kiyose (1977)	道爾吉・和希格 (1983)	烏拉熙春(2009)
321	盂矣	西番	西番	sifan	sifan	si-fan
325	盂夆	西天	西天	sitiyen	sitien	si-tən
583	盂尕臭	犀角	犀兀也黒	si uyehe	si uyehe	si-ujəhə
532	矛甬夾兲	酥	酥一門吉	su imengi	su imeŋgi	su-imuŋgi
812	兄犀盂夊	知悉	撒希西因	sahi sin	sahi sin	sahi-siŋ
東 9	午	賽	賽	sai	sai	sai
東 24	厈	梭	瑣	so	so	so
東 34	赤友矣	賜	賜剌埋	čilamai	silamai	tsïla-mai

＊230　矛盂司　　鞭　　素失該　　sušigai

＊9　　午冗兲　　霜　　塞馬吉　　saimagi

＊524　矛兲　　菜　　瑣吉　　sogi

山村健一：欄外にあげた＊230 の「矛盂司　鞭　素失該 sušigai」の盂は、失 ʃi です。321 の「盂矣　西番　　西番 sifan」の盂は、盂に一点「、」付した字です。加点した盂で、漢語にはあるけれども女真語にはない西 si という音を表記したのでしょう。

盂 ʃi　→加点→　盂 si（女真語にない漢語音）

安井教授：点を付した盂は、漢語借用語の専用字として、使用されています。この si という音ですが、特徴のある借用語音として、ʃi と区別するため表記し分けたのでしょう。もっとも、し女真語話者は、この si を、実際には ʃi と発音したはずです。

山村健一：東 34 の「赤友矣　賜　賜剌埋」については、Kiyose (1977)は čilamai、 道爾吉・和希格(1983)は silamai、烏拉熙春(2009)は tsïla-mai とします。赤（賜）を、それぞれ、či-、si-、tsï-のように、異なった音とします。Kiyose (1977)の č と烏拉熙春(2009)の ts は硬音の子音ですが、その根拠は賜の音が現代北京語で ts^hɨ となっていることにあるのでしょう。

安井教授：賜の音ですが、現代北京語では確かに ts^hɨ ですが、宋代の『古今韻会挙要』、元代の『蒙古字韻』『中原音韻』、明代の『西儒耳目資』では sɨ です。『漢語方音字彙（第二版）』（1989 年）によると、北京 ts^hɨ、濟南 sɨ 又は ts^hɨ 新、西安 sɨ 又は ts^hɨ 新、大原 sɨ または ts^hɨ 新、とあるので、濟南、西安、大原にあっては、ts^hɨ とい

う音は 1949 年以降の新しい読音です。北京語において、ts^hɨ がどのような経緯で採用されるに至ったか検討しなければならないが、明代以前の規範的な音としては sɨ であったとしていいのではないでしょうか。

佐藤久美：この舛ですが、舛の右下に一点「、」を付加して舛より作った字のようにみえます。舛と舛は関連のある発音であったといえそうですね。

安井教授：舛は漢語の子 tsɨ などを表記する漢語専用字だとして、それに一点「、」を付加した舛で、賜の漢語音 sɨ の表記に利用したということになります。

山村健一：文字 sɨ から文字 tsɨ をを作るという方向ならば自然に思えるのですが、tsɨ から sɨ ですと、逆のように見えますね。

安井教授：s は女真語の固有語にある音ですから、そのことを考えると、たしかに逆のように見えます。しかしこれが明朝の文字利用の実際です。時間をさかのぼった金朝の当時ににおいて、どのような音を表記する文字として作られたか、その文字作成の意図を確認する必要があります。その点については、金代女真語の勉強会の折にしましょう。

山村健一：si と sɨ 以外の s-については、漢語借用語（325、583、812 番）と女真語の双方の表記に使用されるので、漢語と女真語に大きな違いはないと認識していたことになります。

	外来語	女真語なまりの音
盂（西）	si	ši
舛（賜）	sɨ	sə

《「来文」における漢語音 ts-,ts^h-, s-の表記》

安井教授：これまで「雑字」を見てきました。「来文」における漢語音 ts-, ts^h-, s-の表記は次のようにいなっています。

番号	漢語	対応する女真語	Kiyose (1977)
4	叚子	禾叉舛	suǰeǰi
12	父子	乢舛	amin ǰi
15	帽子	丛友舛	mahila ǰi
6	子孫	舛冤旱	ǰi omolo
3	左衛	肖刃	ǰowei
8	左衛	肖刃	ǰowei
10	左衛	肖刃	ǰowei
東 2	賜	舛友矣	čilamai
同上	賜	舛友矣	čilamai
東 28	賜	舛友矣	čilamai
東 11	總甲	禾冈朱	sungiya

同上	小甲	寻	šaugiya
東 27	千戸	夷	čenhu

山村健一：「雑字」の表記と矛盾するところはありませんね。

《加点、加画による外来語の表記》

安井教授：佐藤さん、「雑字」と「来文」の漢語音 ts-, ts^h-, s- の表記をみてどのような感想を持ちましたか。

佐藤久美：漢語音を表記するために画や点を加えた文字を利用するところは、契丹小字や有圏点満州文字に似ていると思いました。まとめると次のようになるでしょうか。

契丹小字の場合

・ s に加点して、漢語音 ts-を表記するために を作った。なお、漢語音 ts^h-の表記には別の字 を用いた。

明の女真文字の場合

・漢語音 tsɨ の表記に を利用した。

・ に加点した を利用して漢語音 sɨ を表記した。

・女真語音{ši}を表記する に加点した を利用して、漢語音 si を表記した。

有圏点満州文字の場合

・漢語音 ts-を表記するため， s-に一角加えて を作った。

・漢語音 ts^h を表記するため、 ts-に一角加えて を作った。

・漢語音“四 sɨ”などの母音 ɨ を表記するため、se の母音 e の部分に加点して sɨ などを作った。

安井教授：ところで、596 の の場合、これで漢語音の tso を表記するのですが、これに加点した （瑣）で女真語の{so}を表記します。 が so で、それに加点した で漢語音 tso を表記するのであれば、加点の用い方として一貫するのですが、事実は逆です。この点については検討が必要です。

それでは今日はこのくらいにしましょう。次回は明永楽年間の女真文字・女真語の碑文「永寧寺碑」の勉強をします。